

異言語間における理解の可能性

——ハンス＝ゲオルク・ガダマーの哲学的解釈学の視点から——

早稲田大学

阿達佳子

はじめに

異なる言語圏の者同士が理解し合うことはどこまで可能であるのだろうか。ガダマーの哲学的解釈学を知る者であれば、ガダマーの解釈学に対してこのような問いを投げかけたいくなるだろう。この問いは、ガダマーの解釈学の基本路線である、理解の対話モデルに端を発する問いであるように思われる。ガダマーの論じる「理解 (Verstehen)」は、理解の対象がテキストであれ、人間であれ、他なるものとの対話をモデルとして考えられている。具体的には、対話をモデルとした「理解」の過程は、「共通の言語を練り上げる (erarbeiten)」過程であるとされている (GW1, 384)。しかし、ガダマーの解釈学で語りうる領域を厳密に定めるならば、「異なる言語圏の者同士が理解し合うことはどこまで可能であるのだろうか」という問いは、境界線上に位置づけられる問いとなる。その理由は、ガダマーの解釈学、とりわけ主著『真理と方法』(1960)において、第一に想定されている「理解」がテキスト解釈であり、そしてこのテキスト解釈が伝統の地平と密接に結びつくものとして考察されているからである。ガダマーの主要概念である「地平の融合 (Horizontverschmelzung)」によって示されていたのはまさに、過去の地平に属するテキストを解釈者自身の現在の地平のうちでわがものとする、それが伝統という地平のうちで新たに規定され、それと同時に伝統の地平が変容を被ることである。それゆえ「地平の融合」に対しては、同一の伝統ないし同一の言語においてのみ通用する理論であるという指摘もなされてきた¹。

たしかに、『真理と方法』において異言語間の理解は、理解の極端な特殊ケースとみなされている。というのも、ガダマーの基本的な立場としては、対話者たちが同一の言語を話すことが前提とされているからである。それゆえ、第一言語が異なる者同士の対話は、対話者のうちのどちらか一方が他方の言語に習熟していることが前提とされる。このことは、「対話における合意にとって、そのような言語への習熟はまさに前提条件である。いかなる対話も対話者が同一の言語を話すことが自明の前提となる。」²というガダマーの発言からも明らかである (GW1, 388)。

以上のように、部分的にガダマーの議論を取り上げるならば、ガダマーの解釈学が同一の伝統ないし同一言語においてのみ通用する理論であるという指摘、換言すれば、ガダマーの

¹ この指摘は、ガダマーをヨーロッパ中心主義者あるいは伝統主義者とみなす立場、あるいは Vitkin のようにガダマーの議論が「時間的隔たり」に偏っている点を指摘し、「地平の融合」の適用範囲に疑義を投げかける立場にみられる (麻生, 1978, 314; Vitkin, 1995, p. 58-60)。

² 第二言語の習熟は、「生の遂行」として、「その言語の中で生きている」という意味での言語の習得を指す (GW1, 388)。

解釈学の範囲内では、異なる伝統間の理解あるいは異なる言語間の理解として考えることができないとする立場もありうるように思われる。しかしこれらの指摘には、異なる言語間の理解が「可能か/不可能か」を問うある種の超越的視点が入り込んでいるのではなかろうか。つまり、これらの問いの根幹には可能か不可能かを判断するなんらかの客観性への志向が入り込んでいると仮定される。換言すれば、ハーバーマスがガダマーの解釈学には存在しないとしたメタ言語の次元が想定されている。冒頭にあげた「異なる言語圏の者同士が理解し合うことはどこまで可能であるのだろうか」という問いもまた、これらの想定と同じ問題圏にあるように思われる。

ガダマーの哲学的解釈学において、客観性を求めることはできない。ガダマーがモデルとしている「対話」は、対話者の見解のうちに含まれている先入観を問い、吟味していくソクラテス的な対話である。そのため、言語的なやりとりにおいて事柄の正しさを客観的に検証することではない。したがって、ガダマーの解釈学を異言語間の理解の問題として考察する際には、「生の遂行」のうちでいかに理解がなされるか、という観点からアプローチするほかない。以上をふまえ、本稿ではガダマーの述べる理解のプロセスに定位し、「翻訳」の概念を手がかりにしながら、異言語間の理解がどのように捉えられているのかを明らかにしていきたい。ガダマーの解釈学を俯瞰してみた場合、「翻訳」は概念としては中心的な位置を占めているとはいえない。しかし、翻訳や通訳といった異なる言語間の理解という問題は、ガダマーの見据えていた来たるべき時代にとって、すなわち多元的な世界にとっては「解釈」に並んで考察に値する課題であったと考えられる³ (GW8, 285, 347)。

以上をふまえ、本稿は次の手順で論を進める。第一に、ガダマーの解釈学において「理解」の前提となっている、世界と言語の関係を概観する（第一節）。第二に、翻訳の観点から見た際に顕著となる「理解」のふたつの側面を検討する（第二節）。第三に、翻訳において生じる翻訳不可能性について考察し、晩年のガダマーが視野に入れていた多元的世界と異言語間の理解の問題をみていく。

1 理解における「共通の基盤」としての世界

1-1 世界と言語

まずは、ガダマーの解釈学において「理解」の前提となる世界という概念をみていく。ガダマーの解釈学では、事柄や言語を特定の文脈から切り離された仕方で分析する言語学的アプローチをとらない。あくまでも特定の文脈の内部にとどまりながら、自らの先入観を試し、吟味していくという立場、すなわち人間の有限性に依拠した立場をとる。またヒューバ

³ 「言語の多様性と世界の理解——公開講義 (Ein Studium-generale-Vortrag)」（1990）においてガダマーは、自身の通訳者としての経験をふまえて「通訳は、すでに対話以上の何かである」（GW8, 347）、「読むことは翻訳することのようである」（1989）では、「翻訳者たちは、ほとんど解釈者のようである。しかし、翻訳者たちはそれ以上である。」と述べられている（GW8, 285）。

ート・ドレイファスとチャールズ・テイラーはガダマーの「地平の融合」を实在論へと援用しているが⁴、ガダマー自身は实在論の立場もとらない。ガダマーの立場からすれば、われわれは直接的に世界と接触しているのではなく、すでに言語的に構成されている世界において何らかの事柄と遭遇するのである⁵。

世界とは、「共通でありながら、誰も足を踏み入れたことがなく、誰もが承認している基盤であり、共に語り合う者すべてを結びつけている」ところであると述べられる (GW1, 450)。世界は対話者たちにとって共通のものであり、彼らを結びつけているのは、世界のもつ言語性である。

ガダマーの解釈学において、言語と世界を切り離すことはできない。「言語をもつこと (Sprache-haben)」は「世界をもつこと (Welt-haben)」、換言すれば、「世界に対して態度をとる (sich zur Welt verhalten)」ことであるとされる (GW1, 447)。これらの表現によって意味されているのは、人間は言語をもつことによって、環境世界を超えた意味的世界に関わるということである。例えば、動物は自らのおかれた環境 (Milieu) ないし環境世界 (Umwelt) という物理的条件や身体的な傾向性にしがたうことしかできない。しかし人間は、言語を使いこなすことによって環境から自由になり、世界という意味連関のうちで様々な事柄や他者たちと出会い、それらと関係をもつことができると考えられている (GW1, 447)。言語による環境拘束性の超越という点に、世界の共有可能性の根拠もおかれているのである。

世界が言語的であるがゆえに理解の共通の基盤として機能するということは、世界が時代や場所を超えた接近可能性、さらには拡張可能性へと開かれていることを意味している。このような世界の接近可能性や拡張可能性もまた、言語によって与えられている自由と関わる。すなわち、時間的に隔てられた歴史的世界であっても、空間的に隔てられた異なる言語的、文化的世界であっても、それらが言語的に構成されているかぎり、言語を介して接近しないしは拡張することができるかとされているのである。このような言語的側面から導かれる可能性は、言語の多元性をも超えていく。つまり、人間は環境に拘束されつつも、言語を使いこなすことによって、「環境世界に対して別の立場をとること」 (GW1, 448) が可能になるとされる。つまり、環境に対して別の言語による把握の可能性を視野に入れることが可能となるのである。

1-2 知覚の射映と言語的世界観における射映の類比

言語をもつことによって、環境に対して様々なアプローチが可能になるという点は、現象学における射映 (Abschattung) との類比によって根拠づけられている。フッサールの現象学において知覚対象は、射映という仕方で与えられる。射映とは、われわれに対する知覚対象

⁴ ヒューバート・ドレイファスとチャールズ・テイラーは、「身体化された主体」が实在に関与 (接触) する多元的で頑強な (robust) 实在論を提示する (Dreyfus, H., & Taylor, C., 2015, 102-130)。

⁵ 言語的に構成されている世界については、以下のように述べられている。「歴史的な〈世界〉はつねに、どのような伝統の中であれ、人間的世界、すなわち言語的に構成された世界のように見える。そのような世界はすべて、それ自体でつねにあらゆる洞察に、そして同時に自らの世界観のあらゆる拡張に開かれており、それに応じて他の世界にも接近可能となる。」 (GW1, 451)

の与えられ方を意味する語である。われわれが何かを知覚する際、知覚対象はつねに不完全かつ一面的にしか与えられない。しかしそれにもかかわらず、われわれは諸々の知覚を超えてその対象を経験することができる。このように対象の経験を可能にするのは、地平のはたらきによる。地平は、たんに知覚をする者の見地や把握可能な範囲を意味するだけでなく、諸々の知覚可能性に基づいて多様な知覚を含みこんでいる。そして多様な可能的知覚をその連続性に向けて差し向けるのである。以下の引用は、フッサールの知覚の射映と言語的な射映が類比的に説明されている箇所である。

一方、言語的世界観の射映の場合、それぞれが他のすべての世界観をそれ自体のうちに潜在的に含んでいる。つまり、いかなる世界観も他のすべての世界観へと自己を拡張することができる。言語的世界観は、他の言語で提示された世界の〈見方〉を自分自身から理解し、把握することができる。(GW1, 452)

ここでは、他の言語的世界観は「他の言語で提示された世界の〈見方〉」として理解や把握が可能であり、解釈者自身の世界観と両立可能であると考えられている。ここで想定されるべきは、解釈学的対話の状況である。対話において話題となっている事柄に関する対話者たち各々の見解は、自らの先入観に基づいた一面的な見解である。しかし、知覚における射映との類比で考えるならば、このとき同時に対話相手のもつであろう見解も可能性として視野に入れることができる。つまり、対話者たち各自がもつ地平によって、別のありうるべき多様な見解を指し示すことができるのである。「他の言語で提示された世界の〈見方〉を自分自身から理解し、把握することができる」のは、このような地平のはたらきによるであろう。事柄に関する見解の多様性は、知覚における射映との類比によってその可能性を保証されているのである。このことは、共通の基盤としての世界において、複数の地平が存在することを承認する立場であるとも考えられる。以上の前提をふまえて、第二節では翻訳の観点から「理解」がいかに描かれるかを考察していく。

2 翻訳からみる理解の射程

2-1 別様の理解と過剰照明

ガダマーの翻訳に対する基本的な考え方は、原典の意味を保持しつつ、その意味を別の言語の意味連関のうちへ移し入れるという立場である。ジョン・サリスは、このようなガダマーの翻訳の捉え方を古典的翻訳理論の継承として位置づけている (Sallis, 2001, p. 103)。まずは『真理と方法』において述べられている翻訳者のあり方をみておこう。

この場合、翻訳者は理解される意味を、対話相手が生きている連関の中に移し入れなければならない (*hinübertragen*)。このことは周知のように、翻訳者が他者の意図する意味を歪曲してもよいということではない。むしろ、その意味は保持されるべきであるが、

しかし新たな言語世界の中で理解されるべきであり、その意味は新たな言語世界のうちで新たな仕方での真価を發揮せねばならない。(GW1, 387-388)

上記引用に限定すれば、翻訳においてなされるべきとされているのは、まずもって原典の意味を保持したまま、その意味を別の言語へと置き換えること、すなわち歪曲のない意味の再現である。しかし、歪曲のない意味の再現としての完全な翻訳は、もちろん不可能であるとされる。なぜなら、翻訳者は自らの地平から逃れることができない以上、異なる言語とのあいだにある「隔たり (Abstand)」から逃れることはできないからである⁶ (GW1, 390)。「隔たり」という概念は、ガダマーの解釈学において「理解」の条件のひとつであり、解釈者と解釈対象の間の解消されえない距離を指す概念である。例えば、古典のテキストを読む場合、解釈者はそのテキストの過去の性格に直面し、自らの生きる現在との距離を意識せざるをえない。解釈者に課せられているのは、この隔たりの克服である。しかしこの隔たりの克服は、テキストの著者に身を置き換えたり、著者の創造過程を追体験するという仕方では埋めることはできない。なぜなら、解釈者は自らの有限性ゆえに自らの地平からテキストにアプローチするしかないからである。それゆえ隔たりの克服は、解釈者とテキストの間でなされる対話的なやりとりにおいて、その合意や意思疎通のプロセスを介することで、つねに別様に理解されるという仕方ではなされるほかない。このような過程を経ることで、テキストで語られている事柄は、つねに別様の理解として、つねに異なる文脈で、新たにその息吹を取り戻すことになるのである。

理解がつねに別様の理解となるという帰結は、翻訳の際にはとりわけ際立ってくる。翻訳を行う際には、原典にある何らかの特徴を際立たせようとする、それ以外の特徴を退かせてしまうことが度々生じうる。いかなる翻訳者も、この隔たりゆえに生じる「喪失」から逃れることができない。しかしその一方で、翻訳者の仕事には「解釈による利益」(GW8, 279)が生じることが強く主張される。つまり、翻訳のうちでは何らかの喪失と利益が表裏一体となっており、ガダマーにとってはこの喪失と利益こそ解釈 (Auslegung) と呼びうるものに通じる重要な要素となる。このような翻訳の根本性格は「過剰照明 (Überhellung)」⁷ (GW1, 389) と呼ばれる。

翻訳者はつねに、自らの解釈学的状況に基づけられている。換言すれば、翻訳者はテキストの主題に導かれながらも、自らの地平から、あるいは自らの見地からテキストに取り組むことができるにすぎない。このような意味で、翻訳者とテキストとの関わりは決して中立的ではありえない。射映の箇所述べられていたように、あるいはあたかも翻訳者のいる地点から翻訳対象のテキストに照明をあてているかのように、翻訳のプロセスのうちでは光と

⁶ しかし翻訳の場合には、時間的隔たりだけではなく、言語的隔たりが含まれることになる。それゆえ「異言語性 (Fremdsprachlichkeit) は、解釈学上の難問」(GW1, 391)とされている。

⁷ 「過剰照明 (Überhellung)」は主に『真理と方法』において用いられる語である。『真理と方法』においては、「過剰照明」に関する出典や詳述は見られない。この語の由来として推測されるのは、ハイデガーによる「アリストテレスの現象学的解釈」(1922)である (GA62, 198; 372)。ガダマーがハイデガーの「過剰照明」を継承している点については以下の文献にて論じられている (阿部, 2015, 82)。

暗がりが生じてしまう。「過剰照明」とは、このような光の比喻であり、テキストに対する翻訳者の関わり方を示す語である。換言すれば、翻訳における「過剰照明」は、つねに原典とは異なる解釈とならざるをえない翻訳のあり方を表しているとも考えられる。そしてこのとき生じる利益は、翻訳者の地平からなされた新たな解釈内容である。こうして翻訳は、翻訳者の言語的、時代的地平と融合することによって形成される「模作 (Nachbildung)」と呼ばれるに至る⁸。翻訳という行為は、「模作」としての新たな創造的行為とみなされているのである⁹。

2-2 共通の言語を練り上げること—解釈としての「読むこと」そして「翻訳」—

ガダマーの解釈学における「理解」は、「共通の言語を練り上げる」対話的プロセスである (GW1, 391)。では、テキストと「共通の言語を練り上げる」といった場合、いかなる状況が考えられているのだろうか。ガダマーにとって、書かれた文字、すなわち「テキストとして出会う言語性」は「対話のもつ生气 (Gesprächsleben) から疎外されている」状態にある (GW8, 279)。それゆえテキストの解釈者は、テキストとの対話において、失われた生气を取り戻さねばならない。換言すれば、「文字から意味への変換」によってテキストが語っている事柄そのものを言語化することが解釈者の仕事となる (GW1, 391)。つまりガダマーの解釈学においては、テキストが語っている事柄そのものを言語化することが、対話的なプロセスのうちでなされる解釈学的出来事と考えられているのである。

この対話的なプロセスは、テキストからの語りかけに解釈者が応答すること、このような〈語りかけ-応答〉のやりとりを繰り返すことで、解釈者が自らの先入観を吟味していくプロセスである。この〈語りかけ-応答〉のやりとりは、「問いと答えの弁証法」と呼ばれる。このとき対話に参加する者に求められているのは、「自らの根拠を保持しつつ、〔対話相手の〕反論根拠をともに考慮する」ことであり、自らの意見とは異なる相手の意見を妥当なものとするよう心構えをする (bereit) ことである¹⁰ (GW1, 390)。すなわち、対話に参加する者は、そこで語られている「共通のものに向かって変容する」可能性に向けて開かれていなければならない。このような対話的なプロセスは、合意のプロセスであり、客観的で正しい知識の構築に至ることはない。このような合意のプロセスが「共通の言語を練り上げる」という言葉によって示されている状況である。

ユルゲン・ハーバーマスは、このようなガダマーの解釈学を「日常言語の文法についてのメタ理論を頼りにしない」(Habermas 1985, 253) 理論であると説明している。ガダマーの解釈学は、メタ的な次元から文法法則やその体系を記述するものではなく、また同様の次元か

⁸ 翻訳が「模作」として新たなテキストを作り出すことに関しては以下のように述べられている。「読むことと翻訳することはどちらも、意味と音からテキスト全体を新たに作り出すことである。」(GW8, 284)

⁹ この意味において、解釈は「創造性に境を接する翻訳」とであると述べられる。(GW8, 284)

¹⁰ 「対話における合意は、互いに相手をかかわしたり (Sichausspielen) や自らの見地を押し通すことではなく、共通のものに向かって変容することである。その際、かつてそうであったことのうちにとどまることはない。」(GW1, 384) とされる。

ら言説の正誤を判定することもしない。テキストと「共通の言語を練り上げる」とは、対話における合意のプロセス、理解という出来事の遂行そのものを指しているのである (GW1, 391)。

このような「共通の言語を練り上げる」プロセスは、翻訳においても同様の仕方で行き受けられている。翻訳が原典の言語的地平と翻訳者の言語的地平との融合であり、新たなテキストの形成、すなわち「模作」であるとされるとき、この新たに形成されるテキストは翻訳者とテキストの間で練り上げられた「共通の言語」であるといえよう。「共通の言語を練り上げる」ことは、翻訳においては架橋することとして、以下のように説明されている。

翻訳者とともに創られる痕跡は、われわれが読んだり理解するあらゆるものにとっての堅固なアーチ (Bogen)、すなわち両側から歩いて行くことができる橋であり続けるのである。翻訳は、唯一の土地のなかのふたつの岸のように、あたかも二つの言語を渡る橋 (Brücke) のようである。そのような橋が、絶えず横断され続けているのである。(GW8, 285)

ここで「橋」という表現は、たんなる語の置き換えという意味での翻訳とは異なる意味合いをもっている。たんに語を置き換えるだけでは、「ふたつの岸」は隔てられたままにとどまるであろう。「ふたつの岸」をつなぐ橋を構築するために、翻訳者は原典において語られている事柄と言語が切り離されない仕方で、二つの言語に適した言葉を見出す必要がある (GW1, 390)。そしてこの架橋は、「対話者同士の意思疎通 (Verständigung) と、事柄についての合意 (Einverständnis)」、すなわち共通の言語を練り上げる過程を経ることによってなされるのである (GW1, 387)。

このような言語間の架橋は翻訳における顕著な出来事であるといえよう。しかしガダマーは、「読むことと翻訳することは、すでに『解釈』である」(GW8, 284) というテーゼにあらわれているように、翻訳と解釈のあいだにあるのは「質的な差ではなく程度の差」であると考え (GW1, 391)。というのも、翻訳でなされる架橋は、異言語間でなくとも生じうるからである。ガダマーの挙げる例に即して言えば、詩を読む場合が挙げられる。詩を読む際、読者は書かれている言語が自らの慣れ親しんでいる言語であるにもかかわらず、ほとんど異言語への翻訳と同じようなプロセスを進むことがありうる。翻訳と解釈が「程度の差」であるとしても、翻訳という異言語間の理解——とりわけ次節で検討する詩作の翻訳——は、この「程度」がもっとも大きく、解釈者とテキストの間の隔たりがより強く意識される事例であるといえよう。

以上、翻訳という観点から「理解」という出来事を考察してきた。理解はつねに別様の理解とならざるをえないこと、そして「共通の言語を練り上げる」理解のプロセスは、正しい知識を客観的に構築することではなく、互いの先入観に基づく見解を吟味し合う合意のプロセスであることを確認した。これらはガダマーの「理解」に対する基本的な考え方ではあ

るが、言語的隔たりに由来する翻訳の場合、このふたつの側面はより顕著に現れてくることになる。次節では、これまでみてきた理解の可能性とは反対に、翻訳不可能性について考察を進めていく。

3 翻訳不可能性と理解の可能性

3-1 翻訳不可能性における他者性

前節では、翻訳という営みが「過剰照明」として、そして言語的隔たりの架橋として述べられている点を見てきた。しかしこの橋の構築が、ときとして困難を極めることは否めない。ガダマーは詩の翻訳を挙げ、その困難さについて比喻を用いて以下のように述べる

翻訳不可能性の程度は、幾重にも連なるリーゼンゲビルデのように、脅威的に聳え立ち、その連なりの究極の高みには、抒情的な詩作が雪を永遠に輝かしくみせている。(GW8, 282-283)

ここでは、翻訳不可能性は、山脈の連なりのように翻訳者の前に立ちはだかり、翻訳不可能性の頂点には「叙情的な詩作」が存していると述べられている¹¹。翻訳不可能性の頂点に詩作が位置づけられるのは、詩作の語りという詩作に固有な言語形態に由来する。

ガダマーはパウル・ツェランの詩作の考察にあたり、詩を読むことにおいて現れる「多義性と非決定性 (Vieldeutigen und Unbestimmten)」を指摘する (GW9, 428)。詩作は、「語り、呼吸、声」といったそれに固有な諸要素によって構成されている。詩作のうちでは、これらの要素同士が響き合い、曖昧さや緊張感を含みつつ統一されている (GW9, 428)。さらに詩作においては、ひとつの語が別の意味と共鳴したり、ひとつの語が多数の意味を含みこむことも生じる。それゆえ、詩を読む際には、個々の意味を理解するだけでは不十分であり、諸々の音の響きや多様な意味の共鳴を聴きとる感受性がともに要請される。詩作はつねに、曖昧さや不確かさをもって、読む者に語りかけてくるがゆえに、「多義性と非決定性」のあいだで読者は揺れ動くことになる。

このような詩作の曖昧さは、詩作の翻訳にそのまま反映されることになる。詩作の語りにおいては、意味と音声形態が分かちがたく組み合わせられ、反響し合いながらひとつの詩を形作っている。それゆえ、詩作は書かれた言語の言語性に大きく依存することになる。ガダマーは詩の翻訳においては、書き記された文字としての「語りの分節、転調、律動、強調、わずかなあてこすり」といった詩に固有な語りの諸要素が問題となり、これらを埋め合わせる事が不可能であると明示的に述べている¹² (GW8, 280)。すなわち、多様な要素が含まれ

¹¹ 同様の見解は GW8, 51 においても示されている。

¹² 音とリズムは詩に固有の特徴であり、音楽のリズムが繰り返しであるのに対し、詩のリズムは「意味の動きと音の動きとの間で保たなければならない微妙なバランス」によって成り立っていると述べられる (GW8, 52)。テオドー

る詩の場合、異なる音声形態をもつ言語間の隔たりは、より強く意識されることになる。

詩作の翻訳において直面する隔たりは、円滑な対話を中断させる契機ではあるが、むしろ曖昧さに入り込む契機であるといったほうが適切であるように思われる。このとき翻訳者たちは、その曖昧さという抵抗のまえで立ち止まり、「途方に暮れ」ることになる¹³ (GW8, 284)。詩の翻訳は、翻訳不可能な曖昧さや不確実性と出会う顕著な例であり、他者の声、すなわち他者性が最も顕著に現れる場所である。

翻訳者のテキストとの関わり方はそれ自体、対話における合意の努力に通じる何かがある。ただこの状況は、特に骨の折れる合意の状況であり、その状況において人は自らの見解と相手の見解との相違による隔たりが、結局は埋め尽くせないことを認識するのである。しかし、そうした解消しえない差異がある対話におけるように、あるいは言葉を交わすうちに歩み寄りが成立する場合のように、翻訳者もあれこれと熟慮や検討を重ねることで、それが妥協に過ぎないとしても、最善の解決策を求めようとする。

(GW1, 390)

翻訳という状況は対話における合意のプロセスと類似しているとはいえ、隔たりの埋め尽くしがたさを認識する事例である。しかしここで要求されているのは、この隔たりを完全に埋めるのではなく、隔たりのあいだで「最善の解決策」を求める解釈学的努力である。翻訳不可能性として出られるテキストの他者性は、全き他者性というよりも、曖昧さや不確実さをもつ他者性である。翻訳における解釈学的努力は、この曖昧さにおいて語りかけてくる他者と共通の言語を練り上げようとする試みであり、翻訳不可能性がその理解の可能性を開く契機となっているのである。

3-2 「模作 (Nachbildung)」の再考察と理解の可能性

翻訳者はずねに、原典との対話という理解の遂行から逸れることなく、翻訳可能性の限界を拡張しようと試みる。この試みが共通の言語を練り上げる過程で形成されることになる新たなテキスト、「模作」であるとされていた。最後に「模作」という語に立ち戻り、そこから異言語間の理解について考察していきたい。

ル・ジョージは、詩の翻訳不可能性に関するガダマーの見解の根拠を「それ〔抒情詩のようなテキスト〕は、表現される言語に含まれている語りや生活の文脈に依存する可能性がある」という点にみている (George, 2022, 157)。

¹³ 『ヨーロッパの遺産』では、他者の他者性と他者との共存について以下のように述べられる。「しかし、そこではなにか支配することを学ぶということは問題ではない。われわれは、他者の他者性を、その者の他者性において、われわれに固有な先入観にとらわれてあることに対して経験することを学ぶべきである。われわれが努力し到達すべき最高で最上〔の目標〕であるのは、他者とともに生き、他者との違いを分かち合うことである (teilgewinnen)。それゆえ、われわれの考察に由来する最終的な政治的な帰結を述べるのは、大胆なことでもなかろう。つまり、人類の未来の生存は、たんにわれわれの権力手段や効率性という資源を利用できるかどうかだけにかかっているのではない。他者の他者性、すなわち、人々や国民の歴史的に成長してきた文化だけではなく自然の他者性も含めて立ち止まって学ぶことができるかどうかにかかっている (haltzumachen lernen dürfen)。そうすればこそ、『わたしたち自身という他者』としての他者の人間や他者性を経験し、互いに共存することを学ぶことができる。」 (EE, 33-34)

翻訳が「模作 (Nachbildung)」であると述べられるとき、ドイツ語の *Nachbildung* のうちに「教養 (Bildung)」という語が含まれていることを見逃してはならない。ガダマーにとって教養は、「事物を他者の目でみることができる能力を要求し、またそうする能力を与えもするのである。」(LT147) このような能力は、たんなる技能の習得ではなく、感覚器官や知性の陶冶であると同時に、「自分自身の先入観と自分自身の能力 (Können) についての自意識から距離をとること」でもあるとされる (LT146)。すなわち、教養は、物事の一面的な見方を遠ざけ、地平の多数性を認める能力である。ガダマーは、晩年の論文「言語の多数性と世界の理解」(1990) において以下のように述べている。

われわれが身を置く多元的な世界は、新しいバベルの塔のようである。しかし、この多元的な世界は諸々の課題を含んでおり、それらの課題は、合理化された計画や予めなされた計画ではなく、人間相互の、さらには異他的なものをも超えて開かれた自由な空間を認めることにある。(GW8, 348)

ここでは、ガダマーの視野のうちに、複数の言語の存在と「多元的な世界」が入り込んでいたことを見てとることができるだろう。「教養」という語のうちに、そして上記引用のうちにみることができるのは、事柄に関する見解の多様性と複数の地平を承認する立場である。実際に、われわれは他の言語を習得することが可能であり、他の言語によるものの見方を想定することも学ぶことも可能である。ここでの「異他的なものを超えた人間相互の開かれた自由な空間」とは、たんに他者の他者性をひとつの世界に包含する空間ではなく、複数の地平、複数の言語による参与の空間であるといえよう¹⁴。そこで出会われる他者がどんなに曖昧で不確定であっても、われわれは自らの有限なあり方から決して離れることなく、理解可能性の限界を志向し続けるのではないだろうか。「模作 (Nachbildung)」としての翻訳のうちには、このような複数の地平、複数の言語へのガダマーの考え方が響いているのである。

おわりに

以上、ガダマーの述べる理解のプロセスに定位しながら、その内実を翻訳の概念を手がかりにしながら検討し、その上で異言語間の理解がどのように捉えられているのかを考察してきた。どんなに言語的隔たりがあろうとも、われわれは「理解の遂行」に付き従うかたちでしか共通の言語を練り上げることは出来ない。共通言語の練り上げは理解の結果ではなく、共通言語を練り上げていくプロセスそのものへの参与である。このプロセスのうちでは、

¹⁴ フレッド・ダルマイヤーは、このような複数性をもつ世界を想定したガダマーの解釈について、以下のように述べている。「ガダマーの解釈は、言語と言説の目標がオープンであり、少なくとも部分的には相互に浸透可能であることを強調する。彼の解釈学は、テキストと読者とを根本的に切り離すのではなく、共通世界への埋め込みを強調する傾向がある。この世界は『ユニバース』というよりは『プルリバース』(pluriverse)、つまり異質な要素からなる多重的な構造をもつ。」(Dallmayr, 1996, 45)

正しい知識が客観的に構築されるのではなく、先入観に基づく見解が吟味され、合意が重ねられていく。したがって、ガダマーの解釈学においては、理解の可能性も不可能性もこのプロセスのうちでのみ出される。そして翻訳という観点からは、理解の極端な事例として、このような理解の可能性と不可能性を明確に照らし出している。翻訳は翻訳者の言語的、時代的地平と融合することによって新たに形成される「模作 (Nachbildung)」とされ、翻訳されたテキストは「新たな言語世界」という異なる文脈で意義づけられることになる。翻訳は、異なる言語間の隔たりを架橋し、横断を可能にするのである。異なる言語圏に属する者は、曖昧で不確定な他者かもしれない。しかし、たとえそうであったとしても、ガダマーの解釈学はそのような他者と共なる空間を開き、言葉を交わし合う可能性を提供する。対話者たちが理解したい、理解されたいと望む限りで。

参考文献

- Dallmayr, F. R. (1996). *Beyond orientalism : essays on cross-cultural encounter*. State University of New York Press.
- Dreyfus, H., & Taylor, C. (2015). *Retrieving Realism*. Harvard University Press.
- Gadamer, H. -G. (1990). *Gesammelte Werke Bd. 1.*, Tübingen: Mohr Siebeck. [=GW1]
- (1993). *Gesammelte Werke Bd. 8.*, Tübingen: Mohr Siebeck. [=GW8]
- (1993). *Gesammelte Werke Bd. 9.*, Tübingen: Mohr Siebeck. [=GW9]
- (1989). *Das Erbe Europas: Beiträge.*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. [=EE]
- (1983). *Lob der Theorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. [=LT]
- George, T. (2022). Gadamer on the politics of translation, *The Gadamerian Mind*, edited by Theodore George and Gert-Jan van der Heiden. Routledge, 155-164.
- Habermas, J. (1973). *Zur Logik der Sozialwissenschaften*. (3. Aufl.). Suhrkamp.
- Heidegger, M., & Neumann, G. (2005). *Phänomenologische Interpretationen ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik; [herausgegeben von Günther Neumann]*. Klostermann. [=GA]
- Sallis, J. (2001). *On translation*. Indiana University Press.
- Schmidt, J. Dennis. (2005). *Lyrical and Ethical Subjects: Essays on the Periphery of the World, Freedom, And History*.
- Vitkin, M. (1995). The 'fusion of horizons' on knowledge and alterity. *Philosophy & Social Criticism*, 21(1), 57-76.
- 麻生建 (1978). 「文学史への挑戦——ヤウスの受容美学をめぐって」『文学』, 46, 306-328, 岩波書店.
- 阿部将伸. (2015). 『存在とロゴス：初期ハイデガーにおけるアリストテレス解釈』. 月曜社.